

私の文房四宝

第三回

加藤東陽先生
(高・大・一般 楷書A担当)

月刊「書写書道」手本揮毫者が愛用する「筆・墨・硯・紙」について、いつから使用している用具なのか、どうやって手に入れたのか、使い心地など、各先生の用具への思い入れを題材に連載していきます。今回は、高・大・一般の「楷書A」ご担当の加藤東陽先生に、思い出の筆をご紹介いただきます。

恩師との出会い

私は「書」の道を志した高校・大学時代に、二人の恩師にすばらしい指導を受けました。偶々、二人の恩師は鈴木翠軒（日本藝術院会員・国定教科書執筆者）の高弟で、私にとって、たいへん恵まれた出会いでした。

その教えは、用具・用材や古典・古筆の解釈とともに、臨書から創作への学習階梯（内容・方法）に至るまで「なぜ・どうして」を常に一体不可分な関係として捉えることでした。こうしたことが自分自身の学習の礎を築き、今日に至っていることを思う時、恩師には改めて感謝せずにはいられません。

愛用する筆と思い出

「書の情趣というものは、文字の形から来るものではない、用筆法から生まれるものである。筆は『大小硬軟長短』、その時々に応じて使い分けるが、書線は穂先（命毛）の通り道で決ま

写真1 閑雲



写真2 右軍



写真3 各種課題をよく書く純狼筆

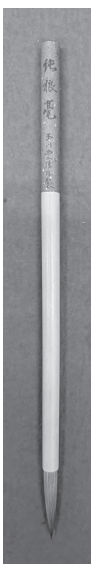


写真4 あさつゆ



写真5 本玉毛



る」。こんなことを少しずつ理解しはじめた頃に出会ったのが、兼毛筆の「写真1」「閑雲（玉川堂）」と「写真2」の「右軍（鷺毛堂）」です。筆

写真6 玉川堂清風製



写真7 桃葉



写真8 長年愛用している山馬筆

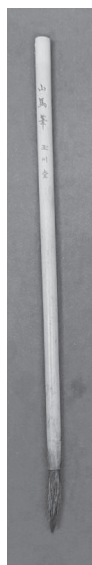


写真9 学校名を書いた多聞



の腰が比較的強く、穂先の開閉が自在になるので、本紙の課題（半紙等）に使用しています。また、「写真3」の純狼筆（玉川堂）で万葉歌（全紙大）を書いたことがあります。筆管が長く、単鉤法でその上部をもつての運筆は楽しいのですが、二字から三字連綿の墨継ぎ（含墨）に苦勞した記憶があります。

また、仮名用（細字）にはイタチ種の毛の「写真4」「あさつゆ（玉川堂）」を主に使用しています。筆管の上部を持ち筆先を見ることで、一本一本の筆毛が線のどこを通るか予見できるようになると良いのですが、なかなか難しいものです。

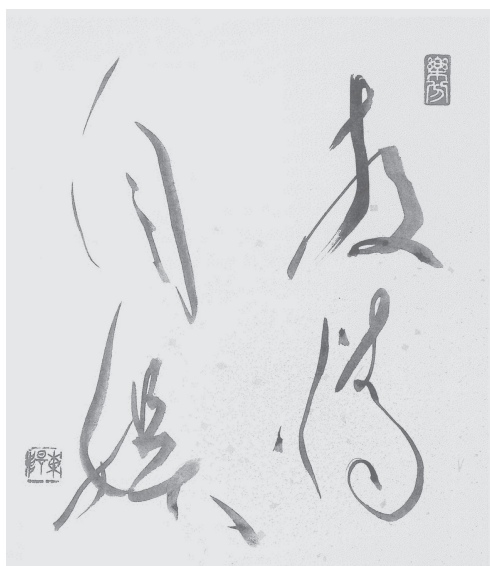
「写真5」の「本玉毛（京都・龍枝堂）」は猫の毛で柔らかく面白い味が出るので、細字・仮名に時折使っています。半切や全紙サイズの作品には、「写真6」の「玉川堂清風製」や「柳葉筆の「写真7」「桃葉（鷺毛堂）」を用いています。イタチ



写真10 全長50cm 近くにもなる大筆です (下は閑雲4号筆)



作品II 写真10の大筆で書いた作品
全体構想を練るのに時間がかかりました



作品I 山馬筆でリズムを目標にしました

やテンの毛が使われていて、含墨も程よく弾力があり半切以上の漢字の書や漢字仮名交じりの書の作品にも扱いやすい筆です。

写真8は山馬筆(玉川堂)で、作品I「放情自娛」を色紙(第二回個展・国立新美術館2A・

令和三年六月)に書いたものです。良寛のようなりズムと線質を求めて、二十年前ほどから「手毬をつく」要領で書いたりして愛用しています。筆先もかなりすり減ってきました。

写真9の「多聞」は東京学芸大学正門の門標(板)や、演題等を書くときに使用した筆です。

写真10は東京学芸大学付属幼稚園で、園児と「筆あそび」をした時に使ったこともある大筆です。「この筆は馬のしっぽの毛だよ」と言って見せると、「えー!」と一斉に驚いており、興味津々の様子でした。

この大筆はあまり出番のないものと思っていたのですが、定年退職直後にホテルのロビーに書作品をお正月に展示したいと依頼を受け、作品IIの「迎春」を書いた時にこの筆を用いました。用意された用紙が4m×3mと大きくなおかつ一枚しか用意されていなかったため、筆の扱いよりも、どのように書くかの構想を練ることに時間を費やした、思い出深い筆です。

筆の役割を考える

「虚掌実指」や「死指活腕」という言葉があります。筆の用法についてはここでは触れませんがこれは、筆を持つ時や運筆する時の要領を言います。この時、「筆はなせ丸いのか?」ということと、「八面出鋒」の用語も合わせて考えるとよいでしょう。

書において線と形は車の両輪または表裏一体ですが、「書は線の音楽」ともいわれます。筆の性能を生かした使い方をすることが大切です。今回執筆にあたって筆について振り返り、筆の持つ役割(特質など)を改めて考え直す良い機会になりました。